

二〇二六年度

沖縄大学 一般選抜（前期）

「国語」

沖縄大学 二〇二六年度 一般選抜 (前期)

国語

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

戦後六十年が経ち、今、私達が沖縄戦を知ろうとするとき、その方法は、体験者の証言を聞いたり、残された記録を読むこと、写された写真やビデオ映像を見たり、①センセキを訪ねることが主でしょう。中でも写真や映像は視覚に訴えるので、与える印象も大きく、これまでも大きな役割を果たしてきました。今後さらにその役割は増していくと思います。しかし、写真やビデオ映像の多くは、米軍の記録班によって撮られたもので、アメリカの国立公文書館や大学などの研究機関から収集されたものです。

そういう写真や映像は、あくまでもアメリカ軍の戦闘の記録や戦術の研究など、軍事利用を直接の目的として撮られたものです。それでも沖縄戦の②イットタンを知ることはできますが、ただ「カメラの視点」の問題に注意しないといけません。何をどう撮るか、を判断したのは米軍であり、米軍の選択によって限定された沖縄戦の映像でしかないのです。カメラのフレームの外では何が起こっていたのか。(1)カメラが写さなかった沖縄戦は何だったのか。そのことを常に③ネントウにおいて見る必要があります。

私がそのことを強調するのは、高校時代の同級生からこういう話を聞いたことがあるからです。その人のお母さんが沖縄戦の記録フィルムを見て、これは本当のことを映していない、と言ったそうです。【 A 】、彼女は戦争中まだ子どもで、家族と一緒に米軍の収容所に入れられたのですが、村人が行列をなして収容所の入り口に歩いていくと、入り口前で米軍の撮影班がカメラを構えて住民を撮っていたそうです。その撮影班の後ろには何名もの米兵がいて、カメラの前を通り過ぎた村人の列から女性を引きずり出すと、茂みに連れて行って次々と強姦したといっています。同級生の母親はそれを目撃しているのです。しかし、撮影班のカメラが、仲間が民間人の女性を強姦している場面を撮るはずがありません。沖縄戦の記録フィルムには、米軍に「保護」されて収容所に向かう住民の列がよく出てきます。その映像のフレームの外で起こった事実を見た同級生の母親は、米軍が撮影した映像の問題を直感したのだと思います。

沖縄戦の記録写真や映像を見ると、壕に隠れていた住民を米軍が保護し、食料を与えたり、傷の手当てをしているものがたくさんあります。幼い子どもを腕に抱いて救出したり、口元に水筒やスプーンをあてている写真もあります。それらは確かに事実でしょう。【 B 】、米兵の「人間性」を強調したそのような映像のすぐ近くで何が起こっていたのか。それを考えないといけません。

沖縄戦の住民の死は誰が直接もたらしたかといえば、そのほとんどは米軍によるものなのです。住民の死は日本軍への攻撃の巻き添えになったもの。そのようにとらえることで、住民がいることを承知で無差別の爆撃や砲撃を行った米軍の問題を不問に付していいのでしょうか。【 C 】、ベトナムやアフガニスタン、イラクで住民虐殺や捕虜虐待を行ってきた米軍が、沖縄戦だけは紳士的にふ

るまっただ言うのでしょうか。沖縄戦で米軍による住民虐殺の記録が少ないのは、戦場で目撃した日本兵や住民の大半が殺され、取材するメディアも少なく、米軍によって記録されることもなかったからではないでしょうか。

沖縄戦の写真でも、路上に倒れた④老婆やハエのたかった子どもなどの写真があります。しかし、誰にどうやって殺されたのかは明示されず、あたかも米軍とは関係なく死んだかのように説明されることがしばしばです。「戦闘に巻き込まれて死んだ住民」というように。写真であれ映像であれ、カメラのフレームの外側にあった戦争を知る努力、想像力を働かせることが重要です。そして、誰が、どのように住民を殺したのかを具体的に考えなければなりません。

沖縄では米軍の撮影した映像を集め、編集して映画やビデオにする「フット運動」が取り組まれてきました。そうやって制作された映画・ビデオの中で、米兵が火炎放射器で砂糖キビ畑を焼いたり、防空壕の中に噴射する場面が出てきます。砂糖キビ畑であれ、洞窟の中であれ、火炎放射器を噴射したら、火だるまになって飛び出してきたり、火に包まれてのたうち回って死んだ住民がいたはずです。火炎放射器の火に追われて、キビ畑から逃げ出した住民や日本兵を米軍は狙い撃ちしたはずですし、黒焦げになって煙を噴き出している死体がいくつもあったはずです。そういう焼け焦げの死体を写した写真はありますが、火に包まれる住民や日本兵の姿を撮った映像は見たことがありません。仮にあったとしても、残虐すぎるということで公開はされないかもしれません。

そうやって、(2) 焼き殺される住民や日本兵の姿は目にしないまま、火炎放射器を噴射する米兵の後ろ姿や戦車だけを見て沖縄戦を認識するというのは、とても怖いことだと思います。それは知らず知らずのうちに、戦争を米軍の視点、殺す側の視点で見ってしまう危険性を持っています。カメラの位置を考えると、火炎放射器を噴射する米兵や戦車の背後や⑤ナメ後ろから撮っている映像がほとんどです。火は手前から向こうに噴射される。【D 1、私は恐怖もなくその映像を見ることができのです。

けれども、洞窟の中やキビ畑に隠れていた住民や日本兵は、どういう視点で火炎放射器の火を見ていたのでしょうか。近づいてくる米兵が火炎放射器の筒先を向ける。恐怖と緊張に見開かれた住民や日本兵の目に赤い光が見えた次の瞬間には、熱風とともに火の⑥塊が迫ってきて、眼球は焼け、全身は火に包まれ、熱風を吸い込んだ肺も焼けて、呼吸もできずにのたうち回っていたはず。そうやって殺された人の目に映った最後の光景を想像することなく、米軍が撮った映像を⑦マンゼンと見るだけなら、攻撃する軍隊の視点を内在化してしまう危険があると思います。

それは火炎放射器の場面だけではありません。米兵が銃撃する場面や戦車が進撃する場面、壕に爆弾を投げ込んだり、艦砲射撃で島を砲撃したり、突っ込んでくる特攻機を⑧撃墜する場面など、あらゆる場面で言えます。イラク戦争のときに米軍のエンベッド(埋め込み)取材が問題となりましたが、映像がどのような視点から撮られているのか、何が写され、何が写されていないのか、という問題は、沖縄戦の記録写真や映像にも共通している問題なのです。

ですから、そのような(3) 米軍が記録した写真や映像を見る際には、沖縄の住民の視線で見直し、検証することが不可欠です。そのときに力となるのが、住民の戦争体験の証言記録です。沖縄には県や市町村、字単位で収集記録された証言集や、個人、団体で発刊された証言集など、⑨ボウダイな量の住民の証言集があります。それを読むことで、撃たれる側、焼かれる側、殺される側、映像に撮られる側の視点から、戦争をとらえ返すことが重要だと思います。肉親を含めて戦争体験者から直接証

言を聞くことが、より重要なのは言うまでもありません。

今、沖縄では「琉球弧を記録する会」によって、自分の生まれ育った地域の言葉であるシマクトウバで沖縄戦体験者の証言を記録する取り組みが行われています。米軍によって記録されたフィルムを収集するのも大事ですが、それ以上に、住民の証言をビデオに記録し、残していくことが大切だと思います。一部の専門家だけでなく、多くの市民が自分の肉親の声や姿とともに沖縄戦の証言を記録することによって、それはさらに意義を増していきます。

沖縄戦に限らず、戦争を多角的、総合的に考えるために、米軍や日本軍の残した記録や戦史、将校の手記も読む必要があります。ただ、私としては、より「低い視点」から見た戦争として、無名兵士や庶民の戦争体験を読むことを一番大切にしたいし、その視点から戦争を考えたいと思っています。

沖縄戦の特色は住民の⑩ギセイが極めて大きかったことにあります。兵隊や軍属の中にも防衛隊や護郷隊、鉄血勤皇隊など、日本軍に動員された沖縄住民が多数含まれていますし、沖縄戦で死んだ日本兵の大多数は、故郷に帰れば農民や労働者として生きたはずの下級兵士です。そういう「庶民の視点」から沖縄戦を見なければ、殺されていた者の⑪無惨さ、無念さも分かりませんし、沖縄戦を教化することもできません。

(4) より「低い視点」で戦争を見るということは、過去の戦争を見るとだけでなく、現在行われている戦争を見るときにも同じです。沖縄戦の継承で大切なのは、そういう「視点」の継承ではないかと思っています。

二〇〇一年九月十一日の米国「本土」への自爆攻撃のあと、ブッシュ政権はアフガニスタンへの「報復攻撃」を行いました。アフガニスタンの街や山岳部が爆撃されているテレビの映像を見て私の母親は、沖縄戦のことを思い出す、と言って、爆撃で殺されていく人達のことを悲しんでいました。米軍の爆撃にさらされるという体験を共有する者として、母は攻撃される側、殺される側の視点でアフガニスタンの戦争を見ていたと思います。

日本にいて多くの人が目にする映像は、米軍が提供したものか、米軍と行動をとともにしているメディアの撮ったものがはるかに多いのが実情です。そのため戦争を見る視点は米軍と共有されていきます。そういう攻撃する側の視点でとらえられた戦争を、絶えず相対化して、突き崩していく努力が必要です。攻撃される側の視点から、米軍とその⑫随行メディアが撮った映像をとらえ返す想像力を働かせねばなりません。

テレビでアフガニスタンへの米軍の爆撃を見て、自分の沖縄戦の体験を思い出し、洞窟の中で殺されていく人々のことを悲しむ感性や想像力。それは、攻撃する米軍の人種差別も含んだ発想の残酷性を⑬露呈させ、米軍の視点からとらえられた映像を批判的に見直していく力にもなると思うのです。

沖縄とアフガニスタンを繋いでいるのは、洞窟に隠れている住民や兵士、それを攻撃する米軍の方法や発想の共通性だけではありません。何よりも、沖縄に巨大な米軍基地があり、在沖米軍が東アジアだけでなく、中東にも展開していることによって、私達はアフガニスタン、イラクに対する米軍の侵略戦争といやがうえにも繋がりを持たされています。沖縄に米軍基地がある限り、沖縄に住む私達は米軍が行う戦争に加担させられているのです。

沖縄戦の経験を通して、現代の戦争をどうとらえていくか。現代の戦争を通して、沖縄戦をどうとらえ返していくか。沖縄戦の結果として米軍基地の占拠が続き、現在にいたるまで沖縄がアメリカの軍事戦略の拠点Ⅱ太平洋の⑭要石として位置づけられている。【 E Ⅰ、在沖米軍の活動範囲は

「極東」をはるかに越えて中東にまで及び、アフガニスタンやイラクにも出撃している。そのようにして、沖縄戦と米軍基地、そして、現代の戦争が深い繋がりを持って、私達に問題を突きつけているのです。

(目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会、二〇〇五年より。ただし、一部改変した)

問一 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】から【 E 】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 しかし ・ だからこそ ・ そして ・ なぜかというと ・ また 】

問三 (1) 「カメラが写さなかった沖縄戦」として適当なものには「○」、適当でないものには「×」をつけなさい。

- (a) 住民に暴力を振るう米兵
- (b) 壕に隠れていた住民を保護する米軍
- (c) 住民に食料を与える米軍
- (d) 老人や子どもの死体
- (e) 米兵による火炎放射器で火に包まれる住民

問四 (2) 「焼き殺される住民や日本兵の姿は目にしないまま、火炎放射器を噴射する米兵の後ろ姿や戦車だけを見て沖縄戦を認識するというのは、とても怖いことだと思います。」とあるが、その理由について、文中の言葉を用いながら八〇字程度で説明しなさい。

問五 (3) 「米軍が記録した写真や映像を見る際には、沖縄の住民の視線で見直し、検証することが不可欠です。そのときに力となるのが、住民の戦争体験の証言記録です。」とあるが、その理由について、文中の言葉を用いながら一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 (4) 「より「低い視点」で戦争を見るということは、過去の戦争を見るときだけでなく、現在行われている戦争を見るときにも同じです。沖縄戦の継承で大切なのは、そういう「視点」の継承ではないか」について、あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。その際、「攻撃される側の視点」「想像力」の二語を用いること。